第9回 江戸川総合人生大学祭

“学ぼう”“人の和”“地域の和”

10 周年インタビュー学科長と語る

ハッピィちゃん、かわいい～

多田区長と北野学長の夢の対談

第9回江戸川総合人生大学祭は、2014年7月26日(土)10時から16時まで、タワーホール船堀に於いて行われた。地域の方、同窓会の先輩方も多く参加され、猛暑の中であったが、750名を超える来場者を得て大盛況となった。会場は1階メインステージと展示・体験コーナー、3階同窓会によるお休み処の3か所。今回は開学10周年を記念し、10周年コーナーも特設された。

華やかな舞

たくさんのお客様

開学 10 周年「種から大きな木に」

本場のサリーを着てみました

熱心に案内する学生

同窓会コーナー「よってこ」

●メインステージ

メインステージ壇上から前田実行委員長の力強い開会挨拶があり午前10時、いよいよ大学祭がスタート。
最初の出し物は介護9期生による「五行体操」、続いて国際10期生による「世界の挨拶、中国体操」、次にまちづくり9期生の「恋するフォーチュンクッキー・青春時代」、さらに卒業生が立ち上げたチームレインボーの「人大　南京玉すだれ」と次々と演技が披露され、会場は早くも熱気に包まれた。プログラムの演技内容はいずれも趣向あふれる見事な出来栄えであった。

中でも来場者の注目を集めたのは、多田江戸川区長と北野学長による「10周年記念夢の対談」であった。10年前のこの大学の設立に関するおふたりの出会いと、この大学が目指すものは、「資格を取るためのものではなく、ここで学びそして培ったものをベースに地域社会に貢献することである」と熱い思いが語られると、それに深くうなずく多くの人々の姿が印象的であった。

プログラム14番目の「コラボDEリレースピーチ」歌声ひろば。1期生から10期生までの全員が一大歌声集団となり、次々と繰り出される歌に、力いっぱい声を張り上げた。ここに集まった仲間の強いきずなとこの大学祭を仕上げた大きな達成感をみんなで感じ取った貴重なひと時であった。

●展示・体験コーナー

熱気に包まれた会場であった。各クラスの体験コーナーには、お客様の興味を引くゲーム･クイズ･折り紙･箸置きづくりがあり、模型の具材をお椀の中に入れて作る雑煮では、懐かしい故郷を思い出させるものもあった。また高齢者体験では、将来の自分の身体を知ることになるだろう若者達が貴重な体験を出来たのではなかっただろうか。
楽しんで、笑顔で帰られるお客様の姿が印象に残った。

●お休み処　よってこ

３階は同窓会コーナーで、飲み物サービスがある円卓とステージ、観客席があり、後方には先輩方が創った活動団体の内容や案内を展示紹介していた。ステージでは合唱、箏演奏、朗読などの演目が進み、フィナーレは観客も一緒に盆踊りで会場をまわり和やかな雰囲気であった。

●スタンプラリー

スタンプラリーは、会場にある３つのポイントを周り、入場の際配られたプログラムにスタンプと人生大学に関するクイズの答えを記入して、正解するとその場でプレゼントが貰えるというもの。
来場した子どもたちより、大人の方が楽しんでいる様子が伺え、なかには在校生に答えのヒントを聞きながら会話も弾んで、人生大学を少し理解いただけたようだ。

同窓会の窓

「江戸川総合人生大学同窓会　第8回総会」が平成26年10月28日(火)江戸川区総合文化センター研修室で開催されました。
新会長・新役員が承認され、クラス幹事一同新たな気持ちでのスタートとなりました。第8期のスローガンは「同窓会を楽しもう！」です。
総会終了後は気仙沼より講師をお招きしての「講演会」さらにその後は「開学10周年を祝う会」が催されました。

同窓会会長　竹原 京美（まち1期）

編集後記

開学10周年で顧みることが多かったこの1年でしたが、これからは新たな創学に向けてのチャレンジが始まります。我々情報紙も次号からは10期生が編集の責任を担うことになります。今後とも皆さんと一緒に歩んでゆけるよう、ご声援をお願いします。

編 集 長　峯岸 和英(国際9期)

編集：「ひと あい えどがわ」編集委員　【9期生】 犬飼キヨ子、衣川章嗣（まち） 菅谷洋子、峯岸和英（国際） 宍戸チイ子、千葉恭子、水野真紀子（子ども） 榎本清一、笹田直子（介護）
【10期生】 中谷喜美子（まち） 大西正子、佐藤宏光（国際） 五十嵐英男、中村雪子（子ども） 嘉陽宗善、佐々木康次郎（介護）

●編集記事に関するお問い合わせは、大学事務局まで　電話：03−3676−9075／FAX:03−3676−6545

江戸川総合人生大学発 ―――― 人と地域をつなぐ情報紙
発行日／2014年（平成26年）11月1日　発行／江戸川総合人生大学
〒133−0061 江戸川区篠崎町7−20−19 篠崎文化プラザ

ひと あい えどがわ

No.27
発行日 / 2014.11.1
創刊日 / 2007.4.10
EDOGAWA SINCE 2004 SOUGOU-JINSEI-DAIGAKU
http://www.sougou-jinsei-daigaku.net/

開学10周年記念　学長・学科長インタビュー特集号

北野 大 学長

学生・卒業生へのエール

ボランティア活動は自発的意思に基づき、無償で公益に資する、人間として最も崇高なものです。自分が今日あるのはまさに皆さんの「お蔭」であり、これからも「お互い様」の心で頑張ってください。それが自分自身の生きがいにもつながりますので。

学びのスタイル

13年前、読売新聞に載った私の記事に目を止められた多田区長さんが、熱い思いをしたためた手紙を下さったのがきっかけだったんですよ。まず、数名の学識経験者と江戸川区民で構成する大学設立準備委員会が平成15年9月に発足。その委員長に推され、大学運営要綱が平成16年8月に施行、そのまま学長に就任することになりました。
その年の10月「資格を取る大学では無く、学んだことを地域に還元する実学を学ぶ大学」をモットーに、江戸川区全体をキャンパスとして江戸川総合人生大学が開学したんです。当時はタワーホール船堀で講義を行っていましたが、平成20年7月に現在の篠崎文化プラザに移転しました。ここは駅からすぐだし図書館も併設されているので学びの環境としては言うことないですよね。

この10年間で、カリキュラムは随時整備され、授業内容も充実してきており、学生の皆さんの満足度も高くなっているのではないでしょうか。また、学外の活動でも、区内に数多くあるボランティア団体の中に活動の場を見出して、思い思いに奉仕の精神を発揮している学生さんや卒業生が多くいますよね。また自ら新たなグループを立ち上げてこれを切盛りしている方もたくさんいる。本当に素晴らしいことだと思います。

現在、私は淑徳大学の教授で『環境安全学』を専門としています。化学物質が人の健康や環境にどのような影響を与えるのかを調査して適切に管理する方法を追究してゆくのが研究テーマなんです。健康でやるべき仕事があるということは本当に有難い。貝原益軒の養生訓を信奉しているのですが、「満腹これ至福なり」の考えから抜け出せず、何時も反省しているんですよ。

これからの10年を見据えたとき、社会からより高い評価を得られるよう、時代の流れに沿って柔軟にカリキュラムを見直すことも必要だと思っています。
守ってゆくものの基本は「自利利他」の精神と地域社会との共生です。そのためには、事務局を含めた教職員が前輪、同窓会が後輪、そして中に在校生、全員が同じ向きで進まなければいけない。そして、「生きがい」というものがもっと感じられる大学であって欲しいと願っています。

取材：
犬飼キヨ子
佐藤宏光
中村雪子

11期生の皆様、ご入学おめでとうございます。

10月1日（水）タワーホール船堀小ホールにて入学式が行われました。今年は、国際コミュニティ学科の応募者の中から抽選が行われ、91名が入学されました。誠におめでとうございます。式では北野学長から開学に至るまでのこと、今までの10年これからの10年など、10周年の節目にふさわしいお言葉をいただきました。共に学ぶ新しい仲間との出会いに、胸を膨らませました。

「開学１０周年記念講演」

入学式後に大ホールに会場を移して、「生きがいとは？」をテーマに北野学長の講演がありました。区外からも多くの方がお越しになり、400名を超える方々が来場されました。地球環境問題や健康長寿、心の豊かさなどについて話され、笑いもあり、北野学長の穏やかな語り口に心が惹きつけられました。

人生大学　地域のために自分の力を活かしてみたい。江戸川総合人生大学はそんな方を応援するために江戸川区が開設した大学です。
（＊学校教育法で定める正規の大学ではありません。）

新たな10年に向けてのメッセージ！

開学１０周年を記念し、学長・学科長へインタビューをお願いしました。
設立当初の思い、過去 10 年間の振り返り、今後への期待、そして学生・卒業生へのエール・・・

江戸川まちづくり学科　佐谷 和江 学科長

学生・卒業生へのエール

10年の蓄積を活かすのは卒業生、そして江戸川区民です！
【10年の蓄積とは】卒業生（人材とネットワーク）／社会貢献人材を生み出すノウハウ（プログラムなど）／エコセンターや子ども未来館、郷土資料室などの他の組織との連携／職員の認識／区民の認識など

活力あるシニアは地域の担い手

「佐谷学科長からご覧になって江戸川区はどのような街ですか？」

鉄道の沿線によって、それぞれ街の成り立ちが明確に違っていて大変興味深いですね。江戸川区は親水公園がたくさんあり、河川も含めこんなに充実している区は他にはありませんし、「親水」という言葉は江戸川区発祥であり誇れるところです。

「人生大学の新たな10年に向けメッセージを頂けますか？」

この10年で卒業生を核とした人的ネットワークは確実に広がっています。今後は、区内の各地域で簡略化した講座を開催する事により、社会貢献活動に関わる多くの人材を生み出せると思います。また、人生大学で補うことができないところを、区の施設や、民間の関連団体、町会自治会等とのネットワークを活用して、一緒になって活動していく事によりパワーが増幅していくことでしょう。

人生大学の認知度という観点で見ると、区民にはまだまだというところなので、江戸川区が推進している共育・協働の理念を進めていくためにも認知度を上げ、行政の力も借りながら進めていくことによりその活動が見えるようになってくると思います。

「設立当初の思いと10年経過した現在とのギャップはありますか？」

最初はNPOのような、職業としての活動が増えるとイメージしていましたが、今はボランティア活動が、地域の人たちの居場所としての機能を持つことも重要と考えるようになりました。それぞれの地域に関わるボランティアを育てる機関として、人生大学を位置づけています。

これからの10年はシニア層が更に増えていく10年になるので、活力のあるシニア層にもっと頑張って頂いて、高齢者から子どもまでを支える担い手として、活躍の場を広げていってほしいと思います。そのためにも、しっかりとした学びを提供し、人材を育成することが人生大学の役割だと考えます。また、今後は若い人達の活躍も期待したいものです。

取材：
五十嵐英男
衣川章嗣
宍戸チイ子

子ども・子育て応援学科　秦野 玲子 学科長代行（取材時）

学生・卒業生へのエール

人生大学での学び合いをとおして、お互いの魅力や可能性を引き出しあう素敵なおとなたちが、この10年間で地域の中にたくさん増えました。これからも「あんなおとなになりたい」と子どもたちに思わせる背中が増え、それが子ども・子育て応援の大きな力となるに違いない、と思っています。

地域ぐるみで子どもたちを育む

先生はRE Learning代表として大学や成人向け講座などで講師をされています。人生大学へは開学時に三輪建二学科長（当時）の紹介で来られたとのこと。10年間ずっと教壇に立ち、人生大学の子ども・子育て応援学科にはなくてはならない大きな存在なのだなと思いました。先生は、学び合う中で子育てを考えてゆく、ゴールを一つに決めない運営に魅かれたそうです。「社会は誰かが作ってくれるのではない。私たちが何をするか、どう作り上げるか。よい関係づくりや、お互いの持つ底力の再発見などに学習支援者として何かお手伝いできるのではないか」と考えられたとのことです。

少子化で子育ての見本がないまま親になり、子育てに悩む人、心無い言葉に傷つく子どものいない人、こうした人たちへの共感も子育て支援の大切なテーマ。

「昔はあった隣近所のお節介、『ねばならぬ』ではない心からの自然な声掛け等々、様々なレベルでの当たり前の普段の関りをいま改めて作り直すことを、みなさんと一緒にやってゆきたいと思っているのです」と。

「子どもとの関り方は子どもが教えてくれる。反応を見れば、その時の子どもの気持ちの状態や子どもの望む関わり方が分かります。子どもが話しかけてきたら3分間、手を止めて向き合いゆっくりと話を聞いてあげてください。子どもに役割を持ってもらい、成果にはアリガトウと感謝の言葉を伝えることで子どもが自分の存在価値を見出します。

一方で気持ちの振幅が大きく表現が下手なため子育てに困っていてもうまく助けを求められない親たちもいます。何が問題なのかという指摘はせず、10分間は話を聞いてあげましょう。話をしているうちに解決方法が見えてくる場合が多々あります。」ともおっしゃっておられました。

先生はバッグに指人形を入れて持ち歩いているそうです。泣いている赤ちゃんや退屈そうな子も突然の指人形にびっくり。先生は常に子ども・子育て応援団なのです。気配りのある温かく優しい印象でした。

取材：
犬飼キヨ子
千葉恭子
中谷喜美子

国際コミュニティ学科　ジョージ・W・ギッシュ 学科長

学生・卒業生へのエール

「人生は時間です」
最近亡くなられた親しい友の言葉を鮮明に思い出す。「命は時間です」江戸川総合人生大学の創立以来、この10年間の時間を共に過ごしたことは、すべての学生にとっては、自分の人生の大切な「時間」でした。私たちが目指しているコミュニティづくりも、地球のすべての人と「時間を共に豊かに過ごす」ことに尽きます。

夢は“地球人”

カンザス州の大学在学中に、オーストリアの難民キャンプで活動するボランティアを引き受けることになりました。その後、またオーストリアに行く予定でしたが、想定しなかった日本に派遣され、名古屋で生活を送りました。一旦アメリカに帰り、ミシガン大学の修士課程で日本文化、日本の音楽（特に琵琶）、仏教文化などを学び、再度日本へ。名古屋に戻るつもりでしたが、東京で働くことになりました。

江戸川区へ関わったのは、人生大学が“地球人を育てたい”というねらいを掲げていて自分の考えと同じだったからです。「とりあえず1年間は引き受ける」と答えましたが、いつの間にか次は11期を迎えることになりました。

この間の大きな実践事例としては、現在西葛西にあるインドの子どもたちが通う学校（ＧＩＩＳ）との交流があげられます。彼らが一番困ったことは日本語の問題でした。そこで、人生大学生が、最初からＧＩＩＳの先生方と協力し合うようになり、発展していったのです。身の周りで何が動いているかを自分の足で学ぶフィールドワークの成果と言えます。

大事なことは「～してさしあげますよ」ではなく、「一緒にやれることはないか」と考え、そこから展開していくことだと思います。「～のため」はいいことですが、互いに地球人として一緒に出来ることを考えていきたいものです。それが“ＦＯＲからＷＩＴＨへ”の考え方です。そのことはまちづくりにもつながっていきます。

私の夢は、４つの学科が内容を共有した上で一つになり、自分の地域で何が必要か考え、自分達がコミュニティづくりに関わっていくことです。これからの10年に必要なことも同じですね。その際、全体的にコーディネートする人が必要になるでしょう。仲間づくりができるこの人生大学で出会った人達が、次の10年の課題に向かってさらにがんばってくれることを期待しています。

取材：
衣川章嗣
佐々木康次郎
菅谷洋子

介護・福祉学科　村田 幸子 学科長

学生・卒業生へのエール

共に学び、共に地域で活動する人たちの、何と多くなったことでしょうか。これからも身の丈よりほんの少し上を目指して、仲間と、そして地域の人たちと、住みよい江戸川づくりに尽力してください。何より「楽しく」ね。

楽しく続けましょう

「大学では英米文学を専攻していたのですが、局からの突然の辞令で、介護・福祉の担当になりました。」この仕事を選ばれたきっかけについての質問に、先生は微笑みながら答えられました。この仕事をしてよかったと思うのは、現場に行って、物事の良い部分、悪い部分が見分けられるようになったことだそうです。

人間はみんな対等で上下関係はないのだから、介護をする側は上から目線にならず、受ける側は卑屈にならないで欲しい。卑屈になる必要は全くないともおっしゃいました。ボランティアは自分のためのものでもあり、自分の器を大きくしてゆくもの、してあげるという意識では駄目。また、余計な手出しをしないこと、痒い所に手を届くというより、本人の出来ない所に目を向けるのです、と強調されました。障がい者を特別扱いして、特別枠に入れてしまうのはよくないこと。浦安にある「夢のみずうみ村」は、いわゆるバリア・フリーではなく、バリアアリー。手すりがなくて、階段がある、坂もある。施設の中を案内してくれる人は障がいのある人です。超高齢社会を迎え、今後は健常者と障がい者の相互乗り入れを密接に行うことが必要です。私は、よい施設があると知ると全国を回って見学しました。

近頃、卒業生の活動が目に見えるようになり、骨太になってきました。しかし、ボランティアと言っても、学びがなければ、現場で何をしてよいかわからない。皆さんは、人生大学で基本的な知識を学び、学ぶ過程で仲間を作り、互いに刺激し合って継続してほしい。しかし、「楽しく」続けることが大切です。もし、家庭や健康などの理由で挫折し、休学するようなことがあったら休戦も可。環境が整ったら、また続けてください。そして学びに火がついたら専門の学校に行って資格を取る。60代ならまだまだ出来ます。

今後、日本の福祉はかなり厳しくなるでしょう。ただ学ぶだけでなく、社会貢献のために、地域に出て行くという道筋のあるところがこの大学のよいところです。

楽しく学び、楽しくボランティアを続けましょう。

取材：
五十嵐英男
榎本清一
菅谷洋子